

## 献血カードシステムに関するアンケート調査の結果分析

千葉泰之・兼松藤男・鈴木一彦・田村弘侯・池田久實

北海道赤十字血液センター

### 1. はじめに

昨年10月より北海道センターを皮切りに同年12月までに北海道ブロック全体に献血カードシステムの導入が行われ、全献血者を対象として光カードを用いた献血カードの配布を開始した。

しかしながら、近年コンピュータシステムの急速な発展で、献血カードとしての光カードの役割が減少してきている。また一方で配布開始から半年経過後、血液センターにおける経済的理由等により今まで以上に経費節減が求められてきており、特に献血カードにかかる負担が大きく影響してきていることから、本年6月より配布対象を献血履歴保有者に限定した。

このようなことから、今後当システムを継続する上でまず費用対効果を念頭に置き、献血者のニーズを掌握するとともに今後のシステム展開に対し足がかりとなるべく意識調査を本年8月に北海道全体で実施し、その結果を分析したので報告する。

### 2. 方法

既に献血カードを保有している献血者1,000人を対象としてアンケート用紙を用いて無記名式により実施した。性別、年齢、職種など偏らないように北海道内全ての献血会場別に規模に応じて回収量を指定した。また質問内容については、回答を肯定的、否定的に誘導しないよう考慮し、当システムに対する理解度や容認度、今後の期待や要望等を収集することを目的とした内容にまとめた。さらに回答には3～4の選択肢を設け、該当する回答がない場合にはその記入欄を全ての質問項目に設定し、より詳細な回答を求めた。

### 3. アンケート結果

献血者1,000人の内訳では、男性 586人、女性 414人で、年齢別では、10歳代 83人、20歳代 279人、30歳代 214人、40歳代 242人、50歳以上 182人とほぼ献血実績の割合に見合った年代層で回収できた。同様に職種についても公務員196人、会社員 401人、高校生 37人、各種学校、短大・大学生 86人、主婦 176人、その他 104人と幅広く分散できた。しかし献血回数では、献血カード保有者を対象としたため、10回以上の多数回経験者の割合が高くなった。

#### Q1：普段献血カードを携帯していますか？

いつも携帯：698人　時々携帯：62人  
献血時のみ：143人　携帯していない：79人

#### Q2：献血カードの最大のメリットはどれですか？

健康管理：337人　検査データの開示・提供：365人

偽名、別人による献血防止：139人

Q3：献血カードの中に過去の検査データ等が記録されていることを知っていましたか？

知っていた：865人 知らなかった：126人

Q4：サービスシステムを利用してご自身のデータを見たことがありますか？

ある：376人 ない：553人 知らなかった：62人

Q5：献血カードの中に下記データを記録することは必要か？

[ア:献血日と献血方法 イ:血液検査結果 ウ:顔写真]

全て必要：675人 全て不必要：47人

分らない：126人 不必要なデータがある；106人

(大半が不必要なデータを顔写真と回答している)

Q6：献血カードの裏面(リライト面)には毎回、献血日・方法・回数・次回献血可能日等を印字しているのですが、特に次回献血可能日はどのように利用していますか？

毎回可能日をチェックしている：681人

分っているので利用していない：177人

その他：92人(大半が勤め先に献血車が来た時に献血するので利用していないと回答している)

Q7：献血カードにどんな機能があれば良いか？

人間ドックのデータ：413人 病院受診記録：286人

クレジット機能：38人 その他：149人

Q8：献血カードと従来の献血手帳(紙)のどちらが良いか？

献血カード：866人 献血手帳：17人

どちらとも言えない：85人

Q9：Q8で 献血手帳を選択した方のみ、その理由は何ですか？

受付時の待ち時間が長いため：5人

献血の記録のみで良い：8人

検査結果は通知書のみで良い：4人

Q10：もしも経済的理由等から献血カードの配布が困難になった場合、どのような対応を望まれますか？

ある回数に達した時(例:10回以上)に配布する：280人

安価な別なカードに切り替える(機能縮小)：351人

献血カードの配布を中止し献血手帳に戻す：281人

その他：35人

(今後も努力して配布を継続すべきという意見が多い)

#### 4. 分析及び考察

Q8の回答結果を見ても分かるように、全体的に献血カードに対し容認はしているものの、Q4でサービスシステムを利用していない献血者が過半数を超えたことは、設置台数

第10回日本光カード医学会論文集、29-31、1999年  
パネルディスカッション1

が少ないことが直接的要因ではあるが、献血カードの持つ特性、必要性を十分にアピールできていないことが言える。つまり各質問における否定的な回答者に対し、より理解が得られるよう広報の必要性を示唆した結果を得た。

また今後のシステム展開に参考となるQ10の質問からは、回答が分散し、さらなる検討を進めていく必要性を感じた。

しかしQ2、3、7の回答結果から健康管理に高い関心があり、血液センターに対する意見・要望記入欄でも他医療施設とのデータ共有化や臓器提供意思表示カードとの併用等、献血カードの利用拡大に寄せる期待が最も多かったことから、今後は費用の軽減化を図るとともに当システムの維持、発展に努力して行かなければならないと考える。